

此間に殿上人召具青侍十餘人、其次御附の與力同心左右に五人宛、其次山田伊豆守引馬、乘物、其次所司代組の與力羽織、立付二人、其次同心左右五人宛羽織、股引、何も同前、其次同心小頭、同心支配與力慎十、助、其次物頭將監、與平、其次醫師三人針御、園意、齋乘、物、藥箱、此間三町程隔、所司代松平伊賀守、引馬、常、其次四五町も引さがりて、菅中納言御局、新大納言御局侍内膳、伊織、其次女中、中將殿侍左、浦沓、○沓恐、近、殿、江坂殿、錦小路殿侍外記、木工、右衛門佐殿、丹波殿、三河殿、又二三町も隔て、有栖川宮對御、狹箱、侍先、三人、次二人、御輿のまはり寺田縫殿、矢部備前、中川舍人、藤木右馬權助、行列の外に御先へ参りたまふ公卿には、中院大納言通躬、園大納言基長、滋野井中納言公澄、冷泉中納言爲綱、風早前宰相公長、桑原前宰相長義、これ皆未明に御先へ参られしとぞ、かくて林丘寺につかせたまふ、まかれども宮には御看經とくと御勤終て、侍女四人にたすけられたまひ御對面、法皇には上段にて御口祝過て、上段より平座に御つき候て、御まどねの中央にならせらる。其外の宮々も御出座、御左に普明院の宮、御右に女一宮、女二宮、一乘院宮、法皇より宮へ進せられもの、黄金三枚、羽二重三疋、綿十把、御弟子の宮、林丘寺宮○靈元、女へ、白銀廿枚、紗綾三卷、又禁裏より白銀十枚、紗綾三卷、普明院宮へ進せらる。又法皇より龍の二幅對揚月、潤筆、普明院へ、青蓮院尊純親王詩歌卷物一卷、林丘寺宮へ進せらる。さて御饗應過て、宮の仰には、御幸めで度難有御事ながら、山寺の事にていさゝかも御もてなしの事侍らず、山の茶屋にて御休息あそばさるべきよし御申あげ御入、御座敷へ御還幸、夕御膳過て、普明院宮の御部屋へ御入、御物語有之、普明院宮の御手を、法皇御取あそばし撫させたまひて、いつまでも御名残はをしく候、又來春は御幸なるべきよし仰らる。宮の仰には、我それまでの命いかでか、此度御拜顔の御名残のよし仰らる。さて還幸なるべきとて御暇乞の時、宮、古法皇○後、水尾にも御幸の時和歌あそばし候、げふもめでたくあそばさるべくやと御尋ありしかば、御硯をこはせ給ふ、其時古法皇御幸の時あそばせし御硯を、今こゝにとり出させ給ふ、法皇御硯を御頂戴ありて